Report 07

支援の行き届かないところへ

仮設 を訪ねて

東日本大震災

仮設住宅を回っていると、住民の間で共通の話題が登場することに気付く。

「〇〇さんのところの息子は引きこもりになっている」

「あそこのお宅は、いると思うけれど会ったことがない」

話が発展し個々への支援が行き届いていないことに話題が及ぶこともしばしばある。

先日、とある仮設住宅の自治会長に近況を伺うと、こんな話がでた。

「ほとんどの仮設の集会所さは、決まったメンバーしか集まんねぇ」

「誘っても出てこねえ人は仕方ねえし、出てこね人さ限って、後で文句かだるもんだ」

自治会長が一人で背負ってきた苦労が垣間みられる話である。

全員の入居者に元気になってもらうことは難しいというのだ。

仮設入居者同士でも注意が払いきれない人が出てきているという現実がそこにある。

私たちの訪問活動では、苦悩のあまり「誰にもわかってもらえない」「ひとりぼっち」と感じておられる方のところに赴きたいと思っている。

そして、その「誰にもわかってもらえない」気持ちをそのまま受け取ることで、苦悩が和らぐことを目的としている。

誤解を恐れずに言うと、仮設入居者全員を元気にすることを目指しているわけではない。

しかし、だからこそできることもあり、微力ではあっても役割が大いにあるのだと改めて感じた自治会長との会話になった。

さまざまな支援の形があるが、完璧な支援活動は存在しない。

常に支援の輪から漏れている人がいるということを、被災地で尽力する多くの支援者が共通の話題にする日が来ることを念じている。

（金澤　豊）